

トップインタビュー

独立行政法人国立病院機構
米子医療センター 院長

濱副 隆一 氏

注目の医師

鳥取大学医学部附属病院
脳神経小児科 科長・教授

前垣 義弘 氏

輝き続ける女性医師

鳥取県立中央病院 小児科 医長

田村 明子 氏

鳥取の病院から

社会医療法人
明和会医療福祉センター
渡辺病院

鳥取の研修医たち

日本赤十字社
鳥取赤十字病院

KLI MI KOS

とっどりの医療

【クリニコス】

2015春号

2015 spring





弓ヶ浜海岸

米子市にある約20kmにわたって弓のように美しい弧を描く海岸。日本の渚百選、日本の白砂青松100選に選定されています。

KLI NI KOS

とつとりの医療
【クリニコス】
2015春号

とつとりの医療

『KLINIKOS（クリニコス）——とつとりの医療』は、

鳥取県で展開されている医療の魅力を、

現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。

県内の医療機関ではどのような医師が活躍しているのか、

どのような研修、チャレンジができるのか、素晴らしい先生方の取り組みや

想いを、特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、

患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在である

ウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を

さす言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに

興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。

願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課



医療の神様
「大國主命」と、
神話の地鳥取県

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大國主命は、医療の神様とされています。



仁風閣

1907年、鳥取藩主であった池田仲博侯爵によって建てられた仁風閣。フレンチ型ルネッサンス様式を基調とした外観の優雅さや日本庭園の美しさが相まって国の重要文化財として指定されています。

CONTENTS

Top Interview
トップインタビュー

独立行政法人国立病院機構 米子医療センター 院長

濱副 隆一氏

優れた人材は、病院だけではなく地域にとっても宝なんです

02

Doctor In focus
注目の医師

鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科 科長・教授

前垣 義弘氏

子どもたちと共に難病と闘いながら全ての子どもたちが幸せに生きる社会づくりをめざす

06

Close Up Women's
輝き続ける女性医師

鳥取県立中央病院 小児科 医長

田村 明子氏

医師として、いつ、どんなときでも変わることなく、優しくあり続たい

09

Our Style
鳥取の病院から

社会医療法人 明和会医療福祉センター

渡辺 病院

あたたかい心と質の高い技術をもって地域ニーズに応える医療を提供し続ける

12

Succeed
鳥取の研修医たち

日本赤十字社 鳥取赤十字病院

人との距離が近い、あたたかな環境のなか日々赤々ならでは多彩で幅広い経験が積める

15

ACCESS

鳥取県へのアクセス



鳥取 約1時間50分 岡山
JR特急直通

鳥取 約2時間30分 大阪
JR特急直通

鳥取 約3時間45分 博多
岡山駅からJR新幹線にのりかえ



東京(羽田)空港

約1時間15分(鳥取空港)

約1時間25分(米子空港)

**KLI
NI
KOS**

STAFF CREDIT

発行 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課
(<http://www.pref.tottori.lg.jp>)

編集制作 【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社
(<http://www.medical-principle.co.jp>)

制作協力 株式会社メディア出版

ライター 田口素行

カメラマン 小山英樹

デザイナー 正代昌寛

Top Interview

トップインタビュー

独立行政法人国立病院機構
米子医療センター 院長

濱副隆一氏

Ryuichi Hamazoe



地域の命を支えるため
医療の隙間を埋めていく

平成26年7月22日。米子医療センターが新病院となって開院した。生まれ変わった米子医療センターの基本理念は、地域の命を支える。だ。病院長の濱副隆一氏は地域の命を支えるため、「県で不足している医療の充実」と「県西部に欠けている医療の整備」の2つを基本構想に掲げ、地域の他病院にない独自の機能に磨きをかけていく。

「地域の各病院が、自分たちのやりたい医療だけではなく、地域に不足している医療の隙間を埋めていってこそ、地域の命を支えることができるのです」と、濱副氏は力強く語った。

新病院には、「幹細胞移植センター」、「腎センター」、そしてがん医療の体制強化を図るため「化学療法センター」を、さらに県西部に整備されていなかった

優れた人材は、 病院だけではなく 地域にとっても 宝なんです

『緩和ケア病棟』を設置した。いずれも県西部の病院にはない、地域に不足している医療の隙間を埋めるものだ。その他にも、大型医療機器の更新、内視鏡検査室の増設、手術映像をモニタリング・配信できる「フルHD術野カメラシステム」など、多彩な機能が整備された。

しかし、ここに辿り着くには幾つもの高い壁を乗り越えなければならなかった。これまで米子医療センターは国立病院時代からの債務を抱え、平成16年の独立行政法人化後も経営状況は思わしくなく、建て替え整備が困難な病院と言われるほど悪化していた。そのような状況下のなか、濱副氏は米子医療センターに赴任する。

「ここに赴任して感じたことは、スタッフがとても優秀であるということ。病院を立て直すに

は、スタッフたちのやりがいを生み、実力を発揮できる環境をつくり、かつ、地域に貢献できる病院にすることが重要だと考えました。当院は政策医療の時代が長かったため、それまで、地域をどう守るのかという観点が足りなかった。地域に開かれた病院をつくり、地域に足りない医療を充実させる。そうすることで医療サービスが向上し、さらにスタッフ一人ひとりが地域に役

立っているという実感が生まれる。それは高いモチベーションとなり病院が大きく活性化すると思っただけです」

地域にしっかり目を向け
チャンスゲインを続ける

濱副氏は、地域をキーワードに改革を行った。一病棟を閉鎖して「がん患者サロン」をつくり、さらに県内初となる「がん相談支援センター」などを設置。また、医療従



「事者を対象とした」「がん医療講演会」や市民を対象とした「がんフォーラム」を開催し、その詳細を新聞紙上に掲載して住民へ情報提供するなど、病院と地域の情報発信、相談、意見交換の場を設け、地域に開かれた病院づくりを推し進めた。こうして地域と病院との距離が縮まり、地域の声が直接病院に届くようになったことで、スタッフたちにやりがいと、地域にどう貢献できるのかという認識が生まれた。

「そして、とにかくチャンスゲインをし続けました。目標を達成したからそれで良いのではなく、チャンスがあれば、それを確実に受け止め活かすこと。地域が望んでいる医療にスタッフがしっかりと応える体制づくりを促進し、病院機能のランクアップをめざしました」
こうして就任1年後の平成19年には早くも黒字決算を計上。以降、黒字経営に転換した。県立や

町立病院のように補助金はなく独立採算制であることを考えると、これは驚異的なことである。黒字転換への快挙は平井県知事をも驚かせ、知事の後押しもあって米子医療センターの建替え構想が一気に加速した。そして病院機能も年毎にランクアップしていく。平成20年には「地域がん診療連携拠点病院」に、平成21年には「非血縁者間骨髄採取・移植施設」に、平成22年には「地域医療支援病院」、「エイズ治療拠点病院」、平成23年には「医師臨床研修指定病院」、平成24年には文部科学省の科学研究費助成事業「科研費」の申請指定機関にもなった。濱副氏が行った病院改革は「世界銀行」が発行するレポートでも高く評価されたほどだ。
「私が特に何をしたわけでもありません。スタッフたちのやりがいと能力を充分に発揮できる環境づくりを進め、何よりスタッフたちが、地域の認識に立てたことが



大きかったと思います」。そう答え濱副氏だが、彼の、地域を見つめる確かな目がなければ病院の立直しはできなかっただろう。その、地域を見つめる目の原点は、濱副氏が医師をめざすきっかけとなった外科の開業医にルーツがあるのかもしれない。

濱副氏は幼少の頃、体がとても弱く近所の外科の開業医によく診てもらっていたという。

「外科医ですが専門外でも地域

に必要とされる医療を診ることのできる先生でした。熱が出たら往診してくれ、ジフテリアで呼吸困難を起こし、生死の境をさまよっていた私を助けてくれた。小さい頃から私の将来は迷い無く、その先生のような何でも診られる外科医となり、へき地で働くことでした」

濱副氏は鳥取大学医学部を昭和50年に卒業し、同第一外科に入局。医局の人事でへき地で働くことは叶わなかったが、幼き濱副氏



を何度も助けた外科医のように、地域に必要とされる医療に出来る医師としての姿勢は失わなかった。濱副氏は、消化器、肝臓・胆道・膵臓、そして乳腺・乳がん領域を研鑽し、幅広い外科的ニーズに応える医師となった。平成6年

には、ウイスコンシン州立大学に留学し、肝移植と膵・腎同時移植を学び、帰国後は同愛会博愛病院で生体腎移植に携わった。その後、日野病院組合日野病院の院長を経て、平成18年に米子医療センターに赴任。その後の活躍は

優れた人材を育成し、強く、暖かく、優しい病院へ

先ほど述べた通りである。

優れた人材は、優れた人材を引き寄せ、優れた人材を育てる。濱

副氏は移植医を育てるため、国内

で初めて15歳未満の少年から膵臓

と腎臓の同時移植手術を執刀し

た杉谷篤医師を迎えるなど、濱副

氏の声かけで全国から優れた医師

が米子医療センターに赴任してき

ている。医師を支える看護師やコ

メディカルも優秀だ。精度の高いが

ん治療を提供するため、がん5領

命を支える大きな宝である。

域を支える認定看護師やがん薬物療法認定薬剤師が育った。スタッフ同士の対話を推進して絆を深め、強いチーム医療体制を構築した。濱副氏は優れた人材育成にも力を注ぎ、強く、暖かく、優しい病院をめざして突き進んでいく。

「優れた人材は、病院の宝でもあるのですが、地域にとってなくてはならない宝ですね。私はその宝である人たちが充分に働ける環境をもっともつとつくっていかねばと思っています」

そう語る濱副氏自身も、地域の命を支える大きな宝である。

命を支える大きな宝である。

Profile

独立行政法人国立病院機構
米子医療センター 院長

濱 副 隆 一 はまぞえ・りゅういち

- 1975年 鳥取大学医学部 卒業
鳥取大学医学部附属病院（第1外科） 医員
- 1982年 鳥取大学 助手（外科学第1講座）
- 1986年 鳥取大学 講師（外科学第1講座）
- 1994年 米国ウイスコンシン大学病院移植外科 臨床研究員
- 1995年 特定医療法人同愛会 博愛病院 副院長
- 2004年 日野病院組合日野病院 病院長
- 2006年 独立行政法人国立病院機構米子医療センター 院長

Doctor in focus
注目の医師！

鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科 科長・教授

前垣義弘氏

日本の小児神経科を長くリードしてきた歴史と実績を受け継ぎながら、
新たな治療開発に向けて日々取り組む

鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科の教授 前垣義弘氏。

前垣氏は子どもたちと共に難病と闘いながら

医療を通して、全ての子どもたちが幸せに生きられる社会づくりをめざしている。



全国の小児神経科医を 養成する場として

前垣 義弘氏を見た瞬間、厳しい表情から覗く優しい瞳に強い印象を受けた。病気の子どもたちを真摯に診続けてきた瞳には、深い優しさが満ちている。

「病気をもった子どもたちは、健康な子どもと同じように日々の生活に楽しみがあり、一生懸命生きています。たとえ完治が難しくても、その子が持っている可能性や力を充分発揮できるように、我々ができることはいっぱいあるんです」と、その優しい瞳がさらに輝いた。

前垣氏は、鳥取大学医学部附属病院（以降、鳥大）の脳神経小児科の教授。ここは日本で最も早く開設された小児神経の専門診療科であり、神経疾患の救急から発達障害、周産期障害、筋疾患、末梢神経疾患など、あらゆる小児の神経疾患に関わり、日本の小児神経分野を牽引している。

前垣氏が脳神経小児科の道に進ん

だのは高校2年生のときに観た医療番組が影響している。「高校2年生のときがちょうど国際障害者年で、テレビでさまざまな医療番組を放送していたんです。それを観て医師になろうと決意しました。鳥大に入学して『障害児教育研究会』というサークルに入り障がいをもっている子どもたちと触れ合いながら、かれらとずっと関わっていきたくて思っただけです」

そして前垣氏は大学卒業後に鳥大の脳神経小児科に入学。以来、小児神経分野の臨床、研究、教育に力を注いできた。現在、鳥大の脳神経小児科の医局員は10名。うち7名は鳥大以外の出身者であり、これまで全国から多くの医師を受け入れてきた。

「子どもの神経疾患は非常に多く、しかも慢性疾患で一生の病気である場合が多い。全国の小児神経科医を養成する場として日本の小児神経学の発展に貢献し、神経疾患を患う多くの子どもと、その家族を支えていきたいです」

障がい児が安心して暮らせる社会づくりを

診療科における近年の研究を紹介すると、前教授（大野耕策

先生）が平成22年から神経型コーシエ病患者に対するアンブロキソールを用いたシャペロン療法法の臨床研究を世界に先駆けて開始。高い安全性、忍容性の高さ、神経症状に対する有効性を確認し、同時に治療効果判定に用いるバイオマーカーの確立にも取り組んでいる。その他、前垣氏が専門とする急性脳症の疫学と脳波解析による早期診断や、さらに医療的ケアの必要な障害児の在宅支援ネットワークの構築にも努めるなど、さまざまな小児神経分野の研究を行っている。

「最先端の治療研究に加えて、重症の障がい児が自宅で安心して暮らせる



鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科

国内有数の小児神経学の専門医臨床研修施設、及び研究機関として日本の小児神経学発展に重要な役割を果たし、コマンドエースから救急疾患、神経難病、重症児の在宅支援まで幅広い診療を提供。また、子どもの心の診療拠点病院推進室を窓口として、地域の医療機関や保健・福祉・教育機関と連携して支援ネットワークを築き、地域で子どもを支えるシステムづくりも行っている。



地域社会の実現も重要なんです。地域の医療関係者や保健・福祉・教育機関と連携しながら、在宅支援を担う医師や、看護師、ソーシャルワーカーなどの養成、そして生活を見越した支援システムの構築にも力を注いでいます」

この障がい児の在宅支援に向けた取り組みは、重症児の在宅支援を担う医師等養成として、文部科学省の教育プログラムに採択されたものだ。その他、全国の小児科医に向けて、小児神経の知識と技量向上を目的に「鳥取大学小児神経学入門講座 米子セミナー」を開催。毎年全国各地から多数の小児科医が参加して小児神経を学び、全国各地の小児医療に活かされている。

光をあてるのではなく、この子らを世の光に

垣氏のモットーは、この子らを世の光に。これは日本の障がい者福祉を切り開いた第一人者で、「社会福祉の父」と呼ばれた糸賀一雄氏の言葉である。

「糸賀氏は、障がいを持っている人は、哀れむべき人、施される人という、光を当てなければならぬ人ではなく、障がいを持っている人の存在そのものが光なんだと聞いた。私はたくさん障がいをもった子どもたちや、そのご家族と接していますが、その子を中心にご家族の生活があり、それが生きがいや幸せになっているんです。障がいをもっている子どもたちは自ら光を放つとても尊い存在であり、それをさらに輝くものにしていきたい」

そして前垣氏には大きな目標がある。それは児童虐待の根絶だ。

「表に出てくる事件性の高い虐待の裏には、たとえば、子どもが病気になることも病院に連れて行かない。親の都合

で学校を休ませる。清潔にされていないなど、多くの虐待があるんです。子ども自身に問題はないが、親の貧困や孤立など家庭環境が不安定なために子どもが本来持っている力を十分に育てられない。いつかは家族支援ができる仕組みをつくり、全ての子どもたちが幸せに育つことのできる社会を実現したいですね」

前垣氏は、未来ある全ての子どもたちの笑顔と幸せをつくるために、子どもたちの病気だけではなく、子どもたちそのものを診続けている。



※糸賀一雄氏とは
大正3年、鳥取市立川町に生まれる。戦後混乱期のなかで孤児や知的障害のある子どもたちを目的に、「この子どもたちの教育と福祉の実践こそが戦後の日本再建の最も大切な事業」と、近江学園を創設した。その後も国の法制度改革など福祉と教育の発展のために生を捧げ、「障害者福祉の父」と呼ばれている。1968年、54歳没。

Profile



鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科 科長・教授

前垣 義弘 まえがき・よしひろ

- | | | | |
|-------|--------------------------------------|-------------|---|
| 1988年 | 鳥取大学医学部 卒業 | 1997年-1998年 | 文部省在外研究員 |
| 1989年 | 鳥取県立中央病院 小児科 | | Section of Epilepsy, Department of Neurology, |
| 1990年 | 国立療養所西鳥取病院
(現 国立病院機構鳥取医療センター) 小児科 | | Cleveland Clinic Foundation |
| 1993年 | 鳥取大学医学部附属病院 医員 | 2003年 | 鳥取大学医学部附属病院 講師 |
| 1993年 | 鳥取大学医学部附属病院 助手 | 2004年 | 鳥取大学医学部 脳神経小児科 准教授 |
| | | 2014年 | 鳥取大学医学部 脳神経小児科 教授 |

脳神経小児科HP

鳥取大学医学部 → 医学科 → 脳神経医科学講座、脳神経小児科講座 (<http://www.med.tottori-u.ac.jp/nousho/about/>)

Close Up Women's
vol.07

輝 き 続 け る
女 性 医 師

医師として、
いつ、どんなときでも
変わることなく、優しくあり続たい



鳥取県立中央病院 小児科 医長

田村明子氏

田村明子氏は鳥取県立中央病院に勤務する小児科医。小児一般はもちろん、小児循環器と新生児未熟児を専門とした医師として活躍している。一般的に小児の医療現場は多忙とされ、残念ながら全国的に小児科医のなり手は少ないのが現状だ。しかし、田村氏からは、そんなマイナスイメージとは異なる明るい笑顔で、医師として充実した言葉が溢れ出ている。





医師として全ての能力が濃縮された診療科

小児科医師は一般的に精神的にも肉体的にも大きな負担を伴うとされている。だが、鳥取県立中央病院の小

児科医師である田村明子氏に疲労の色は全く見えなかった。

その表情はとても明るく、柔らかな微笑みが広がっている。

「小児科医は大変だと言われるのですが、どの診療科もそれは同じです。私自身、小児科が特別に大変だと感じたことはないです」と、田村氏は朗らかに笑った。

父親は鳥取市で開業する外科医。田村氏はその影響から自然と医師をめざすよ

うになり、鳥取大学医学部に進む。そして卒業と同時に同大学の小児科に入局した。小児科は、予防接種や健診、そしてコンディジーズから高度医療を担い、かつ、全身を診る総合力を有し、さらに子どもや親とのコミュニ

ケーション力が必要とされるなど、医師としての全ての能力が濃縮された診療科といっても過言ではない。

「体力面で自信がなかったのですが、学生時代の病院実習時に小児科をまわったとき、女性医師が多く、お子さんのいる先生も生き生きと仕事をされているのを見て、私でも大丈夫だと思いました。小児科を選んで後悔はしていません。とても充実した毎日を送っていますね」

自ら手を上げ小児循環器の研鑽へ

田村氏は現在、小児一般はもちろん、新生児未熟児、小児循環器を専門として活躍している。「心臓を選んだとき、みんなから意外だねと言われました」と、田村氏は目を細める。確かに田村氏の穏やかな雰囲気からは、アクティブさがイメージされる心臓を専門に選んだのは意外と言える。「性格的にじっくり考えるよりも、すぐに体を動かしたいタイプなんで

鳥取県立中央病院 小児科

〒680-0901 鳥取県鳥取市江津730

鳥取県立中央病院は、高度・急性期医療の総合病院で鳥取県東部医療圏の基幹病院。救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域がん診療連携病院などの指定を受け、また、へき地医療拠点病院や二次被ばく医療機関にもなっている。田村氏が勤める小児科では、未熟児・新生児疾患、小児腎疾患、小児循環器疾患、小児神経疾患のほか小児消化器・肝疾患、小児アレルギー疾患、隣接の鳥取療育園からの応援で発達外来など幅広い診療を行っている。2005年11月には厚生労働省の定める「新生児特定集中治療室」の施設基準適合が認定され、またWHO・ユニセフより「赤ちゃんにやさしい病院(BFH)」にも認定されている。2014年6月現在、BFH認定施設は全国で68施設あり、鳥取県では鳥取県立中央病院のみである。



輝き続ける女性医師

す。心臓に興味をもったのは、研修医のときに重症の心臓病のお子さんを診たことがきっかけでした。何とか治してあげたい。その気持ちが強く心に残っていたんです」

田村氏は医師になって3年目頃から小児循環器を診るようになった。そしてより高いレベルの小児循環器医療を提供したいと思い、医局に申し出て「東京女子医科大学日本心臓血圧研究所（現・心臓病センター）」で2年間、研鑽を積んだ。

「術前の管理や、胎児期における循環器疾患の診断などを学びました。心臓病を胎児期に早期発見することで、病態に応じた適切な分娩や、出生後の迅速な治療が可能となります。早期治療ができるかできないかによって予後の回復度が大きく異なってくるんです」

自ら制限を設けず、
高みをめざし続ける

田村氏は胎児心エコーにより、心臓

病を胎児の段階で発見し早期治療に生かそうと産婦人科と協力しながら更なる研鑽を積んでいる。

「心エコーはもともとと練習しないといけません。上手な先生がされると、わずかな異常でも見つけ出すことができるんです。軽症の中から確実に重症を見つけ、速やかに治療につなげていきたい」と、田村氏は力強く語った。

田村氏は医師としても変わりなく、優しくあり続けることをめざしていると言います。それは田村氏のなかにすでに備わっているのでは？ と聞くと、すかさず「そうではないからめざしているんです」と笑顔で返ってきた。田村氏は貪欲に医師としての高みをめざし

ている。女性医師だからといって体力のハンデなど自ら制限を設けることなく、患者のために一生懸命に、医師という仕事に夢中になっている。その内に秘めた自分への厳しさと医療への熱さは、決して表情には表れることなく、穏やかで優しい微笑となって病気の小さな子どもたちへと向けられている。



鳥取県立中央病院 小児科 医長

田村 明子 たむら・あきこ

- 1992年 鳥取大学医学部 卒業
- 1992年 鳥取大学医学部附属病院 小児科学教室入局
- 1993年 松江生協病院 小児科勤務
- 1994年 鳥取大学医学部附属病院 小児科勤務
- 1996年 東京女子医科大学日本心臓血圧研究所（現・心臓病センター）循環器小児科勤務
- 1998年 鳥取大学医学部附属病院 小児科勤務
- 2003年 鳥取市立病院 小児科勤務
- 2005年 鳥取県立中央病院 小児科勤務



Our Style

鳥取の病院から

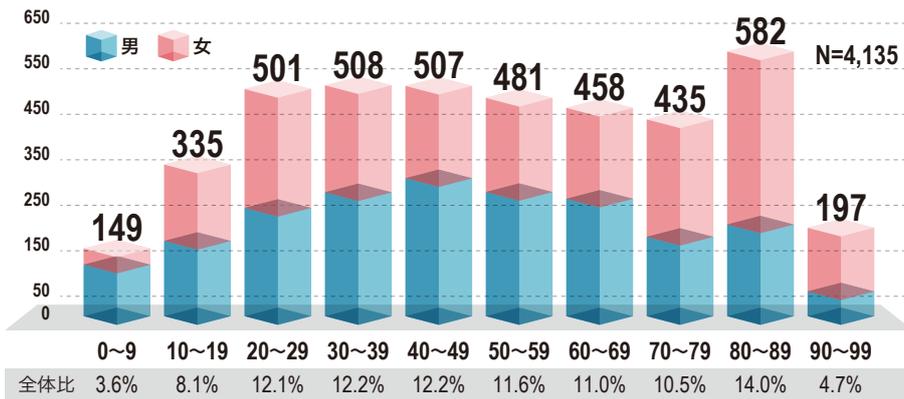
社会医療法人 明和会医療福祉センター 渡辺病院

昭和28年(1953年)の設立以来、急性期の精神科医療をはじめとして、依存症、神経症(不安障害)、うつ病や、発達障害等の思春期疾患、さらに認知症疾患等の多様な精神疾患の回復へ向けての専門治療、リハビリテーションを提供している「社会医療法人明和会医療福祉センター 渡辺病院」。渡辺病院は、地域が必要とする医療を実現するため、時代の流れと共に病院機能を進化させ、病院スタッフたちのあたたかい心と質の高い技術をもって、“こころのケア”と“高齢者の心身のケア”を提供し続けている。

地域に根ざし、
地域に開かれた
病院として

四季折々の美しさを愉しむことが
できる自然豊かな久松山のふもと。
鳥取城址や仁風閣などが位置する
閑静で情緒ある場所に渡辺病院は
建っている。院内に入るとやさしい光
が注ぎ、病院特有の緊張感はなく、
心がほっとする温かさに満ちていた。
渡辺病院は、精神科の単科病院
として昭和28年に設立され、鳥取
市の精神科医療の中心的存在と
して歩んできた歴史と実績をもつ
病院である。精神科における地域
医療は、近年、大きく変わりつつあ
り、精神疾患はがん、脳卒中、心疾
患、そして糖尿病と併せて5大疾
患の一つに位置づけられるほど重要

図1 入院・通院患者の年齢構造 (平成24年4月～平成26年9月)



な疾患となった。地域医療の現場では、精神科の救急医療や機能分化した専門性の高い診療が求められ、学校保健や産業医学の領域を含め、精神科医療のニーズは急速に拡大をみせている。

そうした背景のなか、渡辺病院は

常に地域で必要とされている精神科医療の「その先」を見つめ、病院機能を進化させ続けてきた。全国に先駆けてソーシャルワーカーを配置し、さらに超高齢化社会の到来に備え、平成2年には認知症専門の治療病棟やデイケア施設を開設。平成20年には地域における公益性の高い医療を提供する医療機関として、全国で3番目に「社会医療法人」に認定され、平成21年には、認知症専門医療の提供と介護サービス事業者との連携を担う中核機関である「認知症疾患医療センター」に指定された。

渡辺病院は、年間1,000人を超える初診患者、月間延べ4,000人近い通院患者、1日平均約300名の入院患者の診療にあたる鳥取県東部医療圏の「心の医療」における中核病院として地域を支えている。

患者の年齢層は図1の通り、10歳前後の若い年代から100歳近い超高齢者まで幅広く、思春期、老年期（認知症）、依存症、うつ病・気分障害等の専門外来および多職種連携の

表1 渡辺病院人員構成 (全職員 297名)

医師：	24名 (うち非常勤 14名)
臨床心理士：	4名
作業療法士：	17名
精神保健福祉士 (ソーシャルワーカー)：	12名
看護師・准看護師：	139名
介護福祉士：	73名

(平成26年12月1日現在)

治療チームが外来・入院と貫いた医療を提供。また、訪問看護、精神科デイケア、重度認知症デイケア等の在宅医療を支える部門の層が厚いのも特徴だ。これらのチーム医療を担う専門職は表1の通りで、回復へ向けたリハビリを担う作業療法士、社会適応を支援する精神保健福祉士(ソーシャルワーカー)を数多く配置し、充実したチーム医療で病院全体には活気があふれている。

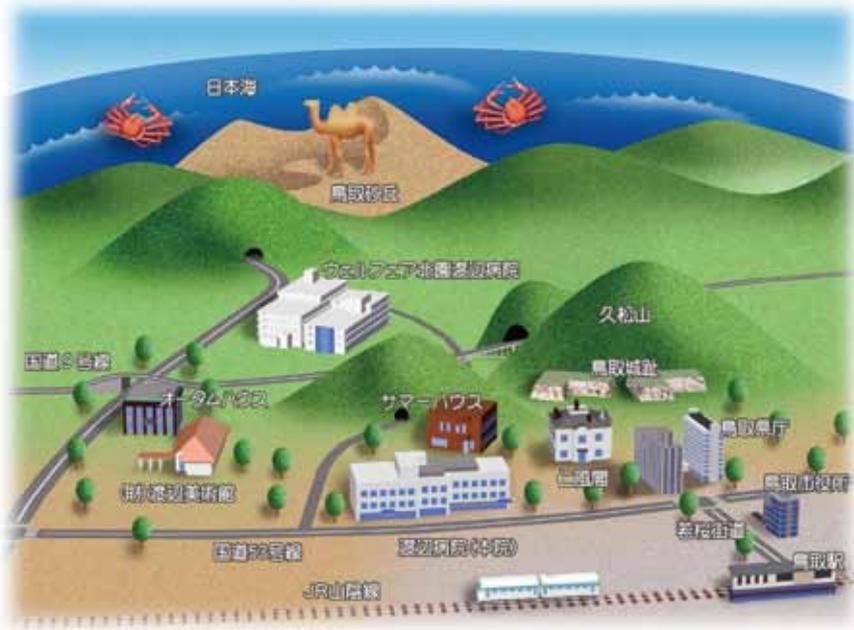
以上を含め、渡辺病院の地域医療における特徴をまとめると表2のようになる。

表2 渡辺病院の地域医療の特徴

- 鳥取市の中心住宅地に立地
- 外来患者が多い (1日180～200人)
- うつ病・気分障害、思春期、老年期 (認知症)、依存症の専門外来および入院チーム医療を積極的に運営
- 入院施設は明るく、開放的
- 他職種によるチーム医療で運営されており、多様な治療プログラムをもつ
- 鳥取県東部二次医療圏における精神科救急医療、認知症医療連携の中核 (認知症疾患医療センター) を担っている
- 鳥取市内の他の急性期医療機関と密接な連携がなされている

「今後10年は地域のニーズにえられる医療提供体制が整ったと思っています。普段の診療の延長で、地域にとって重要だと感じていることを実現化していったんです。

医師、看護師、コメディカルが強いチームとして活動するなかで地域に必要な医療のヒントが得られ、



将来の地域ニーズに最適な医療提供体制の構築に繋がっていったのではと思います」と、理事長・院長である渡辺憲氏は語る。

さらに渡辺氏は病院機能の進化と共に、スタッフが働きやすい環境づくりも進めてきた。その成果は県知事から「第2回 鳥取県うれしい職場 ささえる大賞・最優秀賞」を、さらに公益財団法人日本生産性本部から

「第4回 ワークライフバランス大賞・優秀賞」の受賞などで証明されている。そして働きやすさはスタッフの高いモチベーションとなり、それが個々の能力の研鑽とプロフェッショナルとしての高い意識も生む。優秀なスタッフたちがいるからこそ、病院の新たな試みにも迅速・的確に挑戦

することができ、地域ニーズに応える医療が実現する。そして渡辺病院はそれを実現させてきた。

渡辺病院では明日の精神医療を担う医師を育てることに力を注ぐ。ここでは精神保健指定医、

常に新たな試みに
挑戦し続け
地域ニーズに応える

日本精神神経学会および日本老年精神医学会専門医の資格取得に必要な症例はもちろん、精神科における多様な専門領域の症例を経験することができる。

「精神科医の養成は急務となっています。現在、精神科医療は幅広い領域を包含し、当院では思春期、壮年期、老年期に至る各ライフステージに関わりながら、精神科救急、思春期の心のケア、認知症・老年期精神医療、アルコール依存症医療、うつ病・気分障害など多様な症例に携わることができ。年間約1,100名の初診患者さんが訪れ、精神科救急医療の主力をなす当院の環境でなら、精神

科医師として確かな実力を身に付けることができる。当院は医師として挑戦できる病院です」

渡辺病院は時代と地域が求める医療の先を見つめながら進化し続け、患者、地域、そしてスタッフも幸せになれる医療をめざし続ける。



社会医療法人
明和会医療福祉センター
渡辺病院の
見学などのお問い合わせ先

社会医療法人
明和会医療福祉センター
渡辺病院

〒680-0011
鳥取県鳥取市東町3丁目307
TEL: 0857-24-1151
FAX: 0857-24-1024
URL: <http://www.mmwc.or.jp/>



鳥取の研修医たち

日本赤十字社 鳥取赤十字病院

大正4年に設立されて以来、鳥取県東部地域の医療を支えてきた鳥取赤十字病院。平成27年には開設100周年を迎えると同時に新病棟が完成する。地域の期待もますます高まっているなか、鳥取赤十字病院ではどのような研修が行われているのだろうか。指導医である田中久雄先生と、研修医の岸野瑛美先生に語り合ってもらった。

「日赤」だからこそできる
多彩で幅広い経験

(研修医)岸野先生：研修先を鳥取赤十字病院(以降、鳥取日赤)に選んだのは、大学卒業後は地元に戻ろうと思いい、鳥取市内の病院をいろいろと見学させていただいたなかで、当院の雰囲気が一番良かったからです。それと、私は学生時代から乳腺外科に進みたいと思っていて、乳腺疾患の症例が多かったことも選んだ理由の一つです。

田中先生：僕は研修医のときに鳥取日赤に来たことがあるんです。今まで色々な病院を経験して感じ

Succeed

鳥取の研修医たち



それと、日赤つながりで、救急医療は高知赤十字病院 救命救急センター（高知県）で、地域医療は高山赤十字病院（岐阜県）で行えるのも特徴です。

田中先生…高知赤十字病院の救急は全国的に有名ですよ。研修医は1年目に高知赤十字病院で2ヶ月間救急を経験し、幅広い患者さんの初期対応を学びます。

（研修医）岸野先生…最初の頃は不安で見ていることしかできませんでしたが、救急研修を終えてからは、当直や日直で救急患者さんが運ばれてきても冷静に対処できるようにになりました。

田中先生…それと日赤の特徴として、災害時の救援救護活動を重視していることも挙げられます。救護訓練やトリアージ訓練を行っているので、医師として将来の引き出しの一つとして大きく役立つと思います。

（研修医）岸野先生…本当に多彩な経験をさせていただいていますね。
田中先生…自由選択プログラムの

期間も12ヶ月あるので、上手く利用してスキルを高め、自らの可能性を広げて欲しいですね。

（研修医）岸野先生…せっかく自由度の高い研修をさせていただけるので、こちらから積極的にアプローチしなければもったいないですよ。

田中先生…どの診療科でも、積極的に指導医に食いついていけば知識も技術も大きな学びを得ることができます。

**人と人との距離が近い、
あたたかな環境で**

田中先生…医師は人を相手とする仕事であり、研修医の先生には、
‘人を診る’という医師としての基本的な大切さを教えています。どんなに最高の医療を提供して病気を治したとしても、気持ちや対応の行き違いなどで患者さんへの信頼は崩れてしまうんです。患者さんや、そのご家族から、「あの先生に診てもらって本当に良かった」と、心底満足して帰っていただける医師になって欲しいですね。

（研修医）岸野先生…血液や画像データだけではなく、対話を大切に患者さん一人ひとりに合った診療ができる医師になりたいですね。
田中先生が仰ったように、病気を治すだけではなくて、患者さんが心から元気になっていただける。そんな医師をめざしたいです。

田中先生…岸野先生は、将来、乳腺外科に進みたいということですが、一般的に外科は体力が必要とされ、女性医師にとってきついイメージがあり、外科を選ぶということはあるの覚悟があると思うん

ているのが、鳥取日赤は当時からものすごく症例数が多い病院だということ。僕は消化器内科を専門にしていますが、内視鏡は県内でトップクラスの症例数を誇り、当院で経験を積めば内視鏡技術はすごく上達するはずです。他の診療科も症例数が豊富で多彩な疾患を経験できますよね。

（研修医）岸野先生…そうした環境

のなか、研修医の人数が少ないこともあって、とても密度の濃い研修をしているなと実感しています。





です。この先、結婚や出産など女性医師は大変ですが、頑張ってますと医師を続けて欲しいですね。

(研修医) 岸野先生：結婚、出産、子育てがあっても、医師は絶対に続けていきたいです。

田中先生：岸野先生は本当に頼もしいですよ。鳥取日赤では、ワークライフバランスを考えた働き続けられる職場作りにも力を入れています。育児関連諸制度の充実など、多彩な取り組みをしており、お子さんのいる女性医師も育児短時間勤務を利用し、子育てをしながら医師として活躍しています。女性医師にとっても優しい病院なんですよ。

(研修医) 岸野先生：それに病院の

雰囲気も良いですよ。人と人の距離が近く、患者さんからよく声を掛けていただくんです。「夜遅くまで頑張ってるの?」とか、「土日も大変だね」とか。人のあたたかみをすごく感じていますね。

田中先生：僕は県外の病院にいたことがあります。鳥取に戻ってきた感じは、やっぱり鳥取の人は優しい人が多いということです。

(研修医) 岸野先生：先生方も優しいですよ。質問しやすいですし、丁寧に細かく教えてくれますし、そういう環境だからこそ積極的に医療に取り組みると思うんです。多くの医学生さんに当院を研修先として興味をもって欲しいですね。

田中先生：鳥取日赤は現在、病院の建替工事が進み、平成27年には創立100周年を迎え新病棟が完成します。ますます魅力ある病院に変わり、スタッフのモチベーションもどんどん高まっています。ぜひ当院で研修を積んでいただき、鳥取を支えてくれる医師になってくれ

たら嬉しいですね。



研修2年目

岸野瑛美 (きしの・えみ)

●出身 鳥取県 ●出身大学 川崎医科大学 ●趣味 旅行



指導医 第一内科部長

田中久雄 (たなか・ひさお)

●出身 鳥取県 ●出身大学 鳥取大学医学部 ●趣味 オペラ鑑賞、ツーリング

1992年 鳥取大学医学部 卒業
1992年 鳥取大学医学部附属病院
1993年 鳥取大学大学院医学研究科 (博士課程)
1997年 公立社総合病院
2000年 鳥取赤十字病院



日本赤十字社 鳥取赤十字病院

鳥取赤十字病院は、鳥取県の東部地域における中核病院であり、急性期を中心とした18診療科を持つ総合病院。赤十字病院として、人道博愛の赤十字精神を基本とした医療提供を行い、災害時の救護救援活動を重視し、その機能を十分に発揮するため訓練などを積極的に行っている。大正4年に開設し、平成27年には開設100周年を迎え、また平成25年度に始まった新病棟建設事業の約160床の新病棟が完成。平成30年を予定に350床全体が新たに生まれ変わる予定。

鳥取県で働いてみませんか。

鳥取県は医師のキャリア形成、子育て後の復職などについて積極的に支援しています。



地域医療に関心のある方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（ローテートコース）
複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。
（その間に研修を行うことができます）

子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）
●鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。
●研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関を紹介します。

キャリア形成を考えている方へ

鳥取県専門研修医師支援事業
県外の医療機関に県職員として研修派遣します。
鳥取県医師海外留学資金貸付制度
海外留学のための資金を貸与します。

鳥取県内の求人情報を探している方へ

県内医療機関の求人情報の提供、あっせん、紹介を行います。

見学を希望される方へ

●県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給します。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索

鳥取県で初期臨床研修をしませんか。

鳥取県は県と県内臨床研修病院が協議会を立ち上げ、研修医のための様々な取り組みを行っています。また、医学生が県内臨床研修病院を見学する場合には旅費を支給しています。



鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- 研修医の受講する救急講習 (ACLS,BLS,ICLS) 受講料を助成します。
- 年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- 研修医を対象とした著名講師による臨床研修セミナーを開催します。
- 鳥取県東部4病院（県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取赤十字病院、鳥取生協病院）にマッチングした研修医は、様々な特色を持つ4病院で希望に応じた研修を行うことができます。

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください

鳥取県の臨床研修病院の魅力を知っていただくため、ホームページを作成しています。各病院の最新情報、プロモーションビデオなど魅力満載ですので、ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索



【お問い合わせ】 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室
〒680-8570 鳥取県鳥取市東町 1-220 TEL: 0857-26-7195 FAX: 0857-21-3048
Mail: ishikakuho@pref.tottori.jp